

## イザヤ書27-29章 「御教えに開かれた者」

### 1A 実を結ばせるイスラエル 27

1B 怒りを終わらせた神 1-6

2B 聖められるための懲らしめ 7-12

### 2A 御言葉に鈍い心 28-29

1B 物質的豊かさ 28

1C 肉の欲 1-13

2C 陰府との同盟 14-29

2B 宗教的豊かさ 29

1C 祭壇の炉となる祭り 1-8

2C 深い眠りの霊 9-16

3C 心の貧しき者の悟り 17-24

## 本文

イザヤ書 27 章から読みます。27 章は、24 章から始まる「イザヤの黙示録」の続き、その最後の章です。地の面が揺れ動き、人々のほとんどが死に絶え、そして主がこの地上に戻って来られます。王たちを滅ぼし、地下牢、陰府に閉じ込められます。また天に悪の勢力も閉じ込められます。それによって、弱い者、貧しい者がその地を受け継ぐようにしてくださっているということです。そして神の国には、宴会があります。全ての人、万民の目が開かれたその中でも祝会です。それから、強い町、エルサレムについての歌を歌っていました。そこは、しっかりと主を信頼するところにある神からの賜物である義を受け取っている人々の幻です。信仰によって義とみなされる者たち、彼らは自分の義ではなく、神から下さる義をしっかりと待ち望みます。

そして 26 章 15 節に、主が選ばれた民を苦しみの中を通すけれども、それはしばらくの間であり、その後に主が戻って来られる。そして彼らをその患難の間も匿うという約束をされていました。

### 1A 実を結ばせるイスラエル 27

1B 怒りを終わらせた神 1-6

そして 27 章に入ります。1 節は、6 章 21 節の続きで、主がご自分の住まい、すなわち天から来られて地に住む者たちを罰する、諸国の軍隊を踏みつぶされること教えておられます。その後で主が行なわれることです。

27:1 その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。

主は、悪魔を殺されます。「レビヤタン」とありますが、これはヨブ記 41 章に出てくる大きな動物です。その描写を読むと、これは竜でないかと思われそうですが、ここイザヤ書ではっきりと、これは竜であると言っています。さらに蛇であるとも言っています。竜であったところが、蛇になったと言っても良いかもしれません。なぜなら、創世記 3 章において、エバを惑わした蛇は、神に呪われたことによって地を這う生き物にされました。その前は地を這っていなかったことになりすから、竜であった可能性があります。いずれにしても、彼はサタンです。黙示録 12 章にはっきりと、赤い竜が古い蛇、サタンであると書かれています。

そして黙示録 20 章を見てみましょう。「20:2-3 彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならない。」そして千年後、サタンは解き放たれますが、その後で 10 節に、火と硫黄の池に投げ込まれます。ここから私たちは、横暴な国々、その力のような背後にこの悪魔の仕業があったことを教えてくれます。黙示録を読めば、竜と獣である反キリスト、そして偽預言者であるもう一頭の獣が出てきますが、物理的な力で、主の言葉を信じる者たちが迫害、殉教にあっています。そして宗教的な力、その偽預言者によっても、迫害されています。その背後には、サタンがいます。しかし、主がレビヤタンを罰し、最後には殺されます。ここに私たちの希望があります。しっかりと忍耐して、こうした圧迫は過ぎ去るのだという希望です。

## 2B 聖められるための懲らしめ 7-12

27:2 その日、麗しいぶどう畑、これについて歌え。27:3 わたし、主は、それを見守る者。絶えずこれに水を注ぎ、だれも、それをそこなわないように、夜も昼もこれを見守っている。27:4 わたしはもう怒らない。もしも、いばらとおどろが、わたしと戦えば、わたしはそれを踏みつぶし、それをみな焼き払う。27:5 しかし、もし、わたしのとりでにたよりたければ、わたしと和を結ぶがよい。和をわたしと結ぶがよい。27:6 時が来れば、ヤコブは根を張り、イスラエルは芽を出し、花を咲かせ、世界の面に実を満たす。

主が終わりの日に、イスラエルを回復させてくださいます。「麗しいぶどう畑」についての歌、覚えていませんか？5 章において、主が愛の歌をうたわれました。せっかくしっかりぶどうの木から実がなるように育て養ったのに、酸いぶどう酒が出て来てしまいました。しかし今や、彼らから実が結ばれています、主が水を注ぎ、またいつも見守ってくださっています。すばらしいですね、これは私たちキリスト者が、聖霊によって実を結ばせている姿でもあります。そして、「わたしはもう怒らない。」という言葉が大事です。主が裁かれるのは、ご自分の民にとっては一時的です。目的は、彼らが実を結ばせることができるようにするために、彼らを滅ぼすためではありませんでした。

そして、彼らに対して敵対する者があれば、その者どもを踏みつぶし、焼き払うと言われます。つまり、主が味方になってくださいます。「ローマ 8:31 神が私たちの味方であるなら、だれが私た

ちに敵対できるでしょう。」であります。そして、そうした、贖われたイスラエルに敵対している者たちに対しても主は、「わたしと和を結ぶがよい。」と呼びかけておられます。これはすばらしいですね。最近、アメリカでドナルド・トランプ氏が、国内でテロ事件が起こったことを受けて、「すべてのイスラム教徒の移民を、はっきり分かるまでは入国禁止にすべきだ。」ということを行いました。これを受けて、キリスト教会の指導者がこう言いました。「イスラム教徒の難民が入国することで、私たちは愛を示して、福音を伝えることができる。彼らが将来の、私たちの兄弟、姉妹になるかもしれないのだ。」そうです、敵対している考えを持っていたとしても、神との和解をする呼びかけをしてくださっています。

それからヤコブが実を結ぶことが 6 節に書いてありますが、これは喜びや平和などの霊的な実のみならず、物理的にもこのような実を結ぶことでしょう。終わりの日に、イスラエルはこのような花が咲き乱れるところとなります。そして世界にそれを運んでいく国となります。けれども今のイスラエルも、荒地だったところを開墾して、花を育て、輸出する国になっているのを見ると、その前触れを見る気分です。

27:7 主は、イスラエルを打った者を打つように、イスラエルを打たれたらどうか。あるいは、イスラエルを殺した者を殺すように、イスラエルを殺されたらどうか。27:8 あなたは彼らを追い立て、追い出し、彼らと争い、東風の日、激しい風で彼らを追放された。27:9 それゆえ、次のことによってヤコブの不義は赦される。祭壇のすべての石を粉々にされた石灰のようにし、アシェラ像と香の台をもう立てなくすること、これが、自分の罪を除いて得られる報酬のすべてだ。

今、異邦人の国々が主に拠って打たれました。それは、滅びに至る裁きでした。けれども、イスラエルに対しては違います。イスラエルは確かに追い立てられたけれども、それは自分たちの不義を、偶像と罪を投げ捨てていくことによって、神からの赦しを得るための手段だったのです。私たちはしたがって、自分の心にある罪、偶像、こうしたものが取り除かれる時に、痛みを伴うことを知ります。最も自分が大事にしているもの、それが主ご自身をも越えて与えられるもの、それを主が取り除かれます。

27:10 城壁のある町は、ひとり寂しく、ほうっておかれる牧場のようになり、荒野のように見捨てられる。子牛はそこで草をはみ、そこに伏して、木の枝を食い尽くす。27:11 その大枝が枯れると、それは折られ、女たちが来てこれを燃やす。これは悟りのない民だからだ。それゆえ、これを造った方は、これをあわれまず、これを形造った方は、これに恵みを与えない。27:12 その日、主はユーフラテス川からエジプト川までの穀物の穂を打ち落とされる。イスラエルの子らよ。あなたがたは、ひとりひとり拾い上げられる。

エルサレムから離れて、その町が荒野のように見捨てられている、とあります。なぜなら、彼らが悟りのない民だから、ということです。まだ悟っていない時、彼らは散らされていました。しかし、12

節に主が患難の終わりの時に、主が戻られる時に、穂は打ち落とされるのですが、それでも拾い上げられると神は約束してくださっています。世界離散のユダヤ人が再び集められる約束です。しかも、それはユーフラテスからエジプトの川まで、つまりアッシリヤからエジプトに至るまでそれを行なわれる、ということです。19 章には、アッシリヤもエジプトも共に主をあがめる預言がありました。イスラエルが第三の国となりますが、その一帯が主を礼拝するための地域となります。

## **2A 御言葉に鈍い心 28-29**

そして 28 章です。再び、ユダの人々の心にある問題を主は取り扱われていきます。これまでもそうでしたが、主は何かを語られる時に一連の出来事を終わりまで語られて、再び戻ってきてそして終わりまで語られる、というように語られます。28 章は、さらに彼らの中にある霊的問題について、突っ込んだ内容を語られています。そして、その背景はエジプトとの軍事同盟です。ヒゼキヤ王は、主に拠り頼んでいたのですが、けれどもユダの民や側近の一部が、エジプトに頼るという方向に持って行って、王もその路線に引きずられていたようです。そのことから、いつの間にか他のものに頼っていることによって、自分が取り組まなければいけない霊的問題を見えなくさせている、ということがあります。主はそれに気づいてほしいと願われて、それでアッシリヤの侵略を許されていたのでした。

## **1B 物質的豊かさ 28**

### **1C 肉の欲 1-13**

28:1 ああ。エフライムの酔いどれの誇りとする冠、その美しい飾りのしぼんでゆく花。これは、酔いつぶれた者たちの肥えた谷の頂にある。28:2 見よ。主は強い、強いものを持っておられる。それは、刺し通して荒れ狂う雹のあらしのようだ。激しい勢いで押し流す豪雨のようだ。主はこれを力いっぱい地に投げつける。28:3 エフライムの酔いどれの誇りとする冠は、足の下に踏みにじられ、28:4 肥えた谷の頂にあってこれを美しく飾る花もしぼみ、夏前の初なりのいちじくの実のようになる。だれかがそれを見つけると、それを手に取って、すぐのみこんでしまう。

主は初めに、エフライムに対して語られています。エフライムは北イスラエルの代表的な部族であり、北イスラエル全体に語られていると言ってもよいです。北イスラエルが、その統治の後期にヤロブアム二世によって国が非常に大きくなり豊かになったことは覚えているでしょうか？今も遺跡を見ますと、ヤロブアムの時代のものであるという説明があります。その栄えていた時に、彼らはこの世の楽しみに酔いしれていました。そこで主が、これらを一気に無くすご計画を持っておられました。それがアッシリヤによる侵略です。首都サマリヤを陥落させたのが紀元前 722 年です。

28:5 その日、万軍の主は、民の残りの者にとって、美しい冠、栄えの飾り輪となり、28:6 さばきの座に着く者にとって、さばきの霊となり、攻撃して来る者を城門で追い返す者にとって、力とされる。

「その日」という言葉から始まっています。主が北イスラエルをこのように踏みにじるに任せられたのですが、終わりの日には残された者たちには、美しい冠と栄えの飾り輪を与えられます。主ご自身の救いを与えられるということです。そして、彼らを攻撃する者があっても、彼らのために主が裁かれ、力となつてくださると約束されています。私たちキリスト者にも、主がこの祝福を約束して下さっています。「1テサロニケ2:19私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。」

28:7 しかし、これらの者もまた、ぶどう酒のためによろめき、強い酒のためにはふらつき、祭司も預言者も、強い酒のためによろめき、ぶどう酒のために混乱し、強い酒のためにはふらつき、幻を見ながらよろめき、さばきを下すときよろける。28:8 どの食卓も吐いた汚物でいっぱい、余す所もない。28:9 「彼はだれに知識を教えようとしているのか。だれに啓示を悟らせようとしているのか。乳離れした子にか。乳房を離された子にか。28:10 彼は言っている。『戒めに戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、あそこに少し。』と。」

今、イザヤがこのようにして主の裁きの預言と、その後の残された者たちの回復を語っていますが、そのことについて全く度外視している者たちがいました。それが、ここに出てくる泥酔している祭司や預言者たちであります。恐ろしいですね、幻を見ながら酔いしれてよろめき、その務めを行なっているのです。エフライムにあったその豊かさの中に、彼ら自身も浸ってしまったということです。これは実に残念なことですが、物質的に栄えた教会の指導者たちの中に、この世の繁栄と何ら変わらないのではないかと思われる人々がいることは確かです。

そしてそうした人々に限って、イザヤのような預言の言葉を嫌います。それは、あまりにも単純で、反復しているものであるかと思っていたからです。「彼はだれに知識を教えようとしているのか。だれに啓示を悟らせようとしているのか。」と言っていますが、自分たちはそんなことを知っていると言っていたのです。信者の方々は、もちろん牧師が言っていること、教会指導者が言っていることを簡単には批判できないでしょう。けれども、何か難しいことを言っている、「結局、これはプライドの問題ではないですか？」と福音の真理に照らすと、簡単に反論できてしまうような事柄、というのは実は多いです。だからって、牧師に批判的になっていい、侮ってよいということではありません。けれども、大事なものは「知識で自分を高ぶらせているが、愛がなくなっている」というようになっているということです。

ここの、ここは、子供が基礎的なことを繰り返すときの言葉になっています。新共同訳には、その意義が表れるようにヘブル語もあります。「戒めに戒め、戒めに戒め」は、「ツァウ・ラ・ツァウ、ツァウ・ラ・ツァウ」で、「規則に規則、規則に規則」は、「カウ・ラ・カウ、カウ・ラ・カウ」と括弧書きになっています。

伝道者の書に、「神は人間をまっすぐに造られたが、人間は複雑な考え方をしたがる(7:29 新



共同訳)」という言葉があります。人間はもともとまっすぐに造られています。幼子でも真理が分かるように、信仰という手段で私たちに神との関係を教えています。ところが、それを人間は拒みません。基本的なことさえ出来ていないのに、そのできていないことを改めないで、もっともっと複雑なことを考えようとするのです。高尚なことを求めて、パウロの朴訥な言葉を見下げていたコリントの教会に対して、十字架の言葉の単純性について話しました。「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。それは、こう書いてあるからです。『わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。』知者はどこにいますか。学者はどこにいますか。この世の議論家はどこにいますか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。(1コリント 1:18-20)」真理は単純なのです。けれどもこの世の知恵は複雑です。

28:11 まことに主は、もつれた舌で、外国のことばで、この民に語られる。28:12 主は、彼らに「ここにいいいがある。疲れた者をいこわせよ。ここに休みがある。」と仰せられたのに、彼らは聞こうとはしなかった。28:13 主は彼らに告げられる。「戒めに戒め、戒めに戒め、規則に規則、規則に規則、ここに少し、あそこに少し。」これは、彼らが歩くとき、うしろざまに倒れ、手足を折られ、わなにかかって捕えられるためである。

主が彼らに、はっきりと分かる、何をすればよいか分かる言葉で、語られたのに、それを「乳飲み子に語っているのか。」とあざけりました。それゆえ、分からない言葉によって彼らを裁かれたということです。アッシリヤに侵略されて捕え移されていく時に、彼らは聞きなれないアッシリヤ語を聞くことになりました。これが、主の彼らへの裁きの印です。午前中もお話しましたが、主が語られているのにそれを聞かないと、ついに何が起きているのか、神の声が聞こえなくなります。

そして、ここで大事なことは、主の言葉の中に慰みがあるということです。私たちは主の命令を聞いた時に、重荷を負わせられるのではなく、むしろ命令こそが私たちが重荷を主に持っていくことのできる休みを得ることができます。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。(マタイ 11:29)」

## 2C 陰府との同盟 14-29

28:14 それゆえ、あざける者たち・・エルサレムにいてこの民を物笑いの種にする者たちよ。主のことばを聞け。28:15 あなたがたは、こう言ったからだ。「私たちは死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる。たとい、にわか水があふれ、越えて来ても、それは私たちには届かない。私たちは、まやかしを避け所とし、偽りに身を隠してきたのだから。」

13節までは、実は前座でした。主が語られようとしていたのは、ユダに対してです。既に北イスラエルのアッシリヤ捕囚は実現していました。北イスラエルが、酔いどれになっていて、主の言葉を聞かないでいて、それでアッシリヤに捕え移されたということを南ユダは見ていました。それで、

「あいつら馬鹿だな。全く信仰がなっていない。」とあざけていたのです。けれども、実は自分たちも、エジプトという世の力に頼っていることを主は、明らかにされています。

「私たちは死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる。」というのは、イザヤが彼らに語った言葉です。エジプトと軍事同盟を結んだが、それはあなたがたに死をもたらすものだ、陰府に下らせるものだということです。エジプトは助けにならず、アッシリヤがエルサレムを包囲するだろう、ということです。けれども、彼らは、「たとい、にわか水があふれ、越えて来ても、それは私たちには届かない。」と言っています。アッシリヤからの水が洪水となって、ユダにまで及ぶという預言に対して、「届くわけないだろう、あなたがたの死の契約があるのだから。」と言っているのです。そして、「私たちは、まやかしを避け所とし、偽りに身を隠してきたのだから。」というのもイザヤが語っていた言葉を当てこすって話しています。

このようにユダは、他の人たちを見て、その愚かしさを笑っているのですが、実は自分自身に同類の問題があることに気づきませんでした。まやかし、偽りとあるように、自分は大丈夫だとしていて、自分自身を欺いていたのです。神を信じていると言いながら、そうではなく実際は他の人間的なものに拠り頼んでいるということです。

28:16 だから、神である主は、こう仰せられる。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。28:17 わたしは公正を、測りなわとし、正義を、おもりとする。雹は、まやかしの避け所を一掃し、水は隠れ家を押し流す。28:18 あなたがたの死との契約は解消され、よみとの同盟は成り立たない。にわか水があふれ、越えて来ると、あなたがたはそれに踏みにじられる。28:19 それは、押し寄せるたびに、あなたがたを捕える。それは朝ごとに押し寄せる。昼も夜も。この啓示を悟らせることは全く恐ろしい。」

エジプトとの同盟は早まったものです。ここに、この礎石を信じる者は慌てることはない、とありますが、それを彼らは行ってしまいました。私たちの生活は、信じていく、しかも忍耐して信じていくというところに立ちます。この方、イエス・キリストのみが私たちを建て上げてくださることを知ります。しかし、目まぐるしく動くこの世の中で何か目に見えるもの、陰で隠れて行ってしまう業、そういったもので安心しようとしてしまいます。しかし、この方こそ頼れる岩なのです。ユダは、この石に頼ることをしなかったので、エジプトとの同盟による助けは来ず、むしろエジプトのほうに頼ったのでアッシリヤが勢いずいて、ますますユダの町々を倒していきました。アッシリヤのほうの文献では、ユダの64もの町々や居住地を征服したと書かれています。

28:20 寝床は、身を伸ばすには短すぎ、毛布も、身をくるむには狭すぎるようになる。

午前の説教で話しました。これは、「全く安心できない」ということを、小さすぎる寝床、狭すぎる

毛布に例えています。お寒い状況ですが、いろいろなものに頼ろうとしている状況は本当にお寒いのです。安心することはできません。

28:21 実に、主はペラツィムの山でのように起き上がり、ギブオンの谷でのように奮い立ち、そのみわざを行なわれる。そのみわざは異なっている。また、その働きをされる。その働きは比類がない。28:22 だから今、あなたがたはあざけり続けるな。あなたがたを縛るかせが、きつくされるといけないから。私は万軍の神、主から、全世界に下る決定的な全滅について聞いているのだ。

主が、「ペラツィムの山でのように起き上がり、ギブオンの谷でのように」というのは、一つはダビデがペリシテ人に勝利した出来事、もう一つはヨシュアがカナン人の王五人に勝利した出来事のことを指しています。ダビデの時は、彼がイスラエルとユダの統一王として即位した時です。ペリシテ人がレファイムの谷間に侵入しました。そこで、ダビデが彼らを打ったのですが、「歴代誌第一14:11 神は、水が破れ出るように、私の手を用いて私の敵を破られた。」という快進撃でありました。そしてヨシュアにおいては、良く知っておられるように、空に上っている太陽、また月が留まれと言ったら、留まった、それで五人の王の軍を追撃できた、ということです。

ここで主が言われているのは、このような通常とは異なる、比類なき大勝利を与えるということです。彼らはエジプトに抛り頼んだことによって、それでかえって痛手を被っていました。その契約によって、かえって自分たちに枷をかけていました。しかし、主は彼らの愚かさを、エルサレムをアッシリヤに包囲させて、それからアッシリヤを一気に倒すという大きな御業によって明らかにする、ということです。

28:23 あなたがたは、私の声に耳を傾けて聞け。私の言うことを、注意して聞け。28:24 農夫は、種を蒔くために、いつも耕して、その土地を起し、まぐわでならしてばかりいるだろうか。28:25 その地面をならしたら、ういきょうを蒔き、クミンの種を蒔き、小麦をうねに、大麦を定まった場所に、裸麦をその境に植えるではないか。28:26 農夫を指図する神は、彼に正しく教えておられる。28:27 ういきょうは打穀機で打たれず、クミンの上では脱穀車の車輪を回さない。ういきょうは杖で、クミンは棒で打たれるからである。28:28 パンのための麦は砕かれない。打穀をいつまでも続けることがないからだ。脱穀車の車輪を回しても、馬がこれを砕きはしない。28:29 これもまた、万軍の主のもとから出ること、そのはかりごとは奇しく、そのおもんばかりはすばらしい。

イザヤは、とても分かり易く話すために、例えを用いています。私たちは農耕をすることはないので、かえって分かりづらいですが、イエス様もたくさん農耕の喩えによって話しておられましたね。ここでの要点は二つあります。一つは、「いつまでも同じことをしているのではない」ということです。もう一つは、「異なる働きがある」ということです。農作業においても、神の導きで、農夫がいつも同じ作業をしているのではなく、次の作業を行い、それから種ごとに異なる脱穀の仕方があり、いつも同じ脱穀ではないのだ、ということです。ここは、とても大事ですね。



私たちはとかく、「これまでこうだったのだから、これからもこうなるだろう。」と考えてしまいがちです。「この人はずっとこんなに心が頑なだから、これからも頑なだろう。」と思ってしまうのです。そして、「主の働きは同じ」と思ってしまう。違いますね、主は御霊によって、大きな山も動かすことのできる方です。主は長いこと、何もしていないかのように見えます。そして、事実、何も行動に移さないことがあります。けれども、する時はするんですね。そして、御霊の働きによれば、これまでにない働きというものがあるのです。ですから大事なものは、イエス様という石にいつも断ち続けることです。この方の中にいることは、しんどい作業です。長いこと、何も起こっていないように見えます。いつもと変わらないように見えます。けれども、主はご自分の時に、比類なきことを行ってください。ですから、イエス様以外のところに行っても、お寒くなるだけです。真の平安が来ないのです。

## 2B 宗教的豊かさ 29

28章は「世的になる」ことについてですが、29章は「宗教的になる」ことについて見ていきます。

### 1C 祭壇の炉となる祭り 1-8

29:1 ああ。アリエル、アリエル。ダビデが陣を敷いた都よ。年に年を加え、祭りを巡って来させよ。  
29:2 わたしはアリエルをしいたげるので、そこにはうめきと嘆きが起こり、そこはわたしにとっては祭壇の炉のようになる。29:3 わたしは、あなたの回りに陣を敷き、あなたを前哨部隊で囲み、あなたに対して壘を築く。29:4 あなたは倒れて、地の中から語りかけるが、あなたの言うことは、ちりで打ち消される。あなたが地の中から出す声は、死人の霊の声のようになり、あなたの言うことは、ちりの中からのささやきのようになる。

ここでのアリエルは、エルサレムのことです。「アリエル」は、二つの意味があります。一つは、「神の獅子」です。ダビデが陣を敷いた町、祭りを例年行なっている町は、勇ましく、神の壮健さがあります。ダビデが神の箱をエルサレムに持ってくる時、彼が力いっぱい主の前で踊ったことを思い出してください。そしてもう一つの意味は、2節にある「祭壇の炉」です。幕屋あるいは神殿の外庭に、青銅の祭壇がありますね。アリエルには、この意味もあります。つまり今、神は、勇ましく、壮健な町が、祭壇の炉のように、火の試練を受けているということです。エルサレムがアッシリヤに包囲されています。そこで、これだけ勇ましく大きな声を出していたエルサレムが、地の中でささやくように低められるということです。つまり、宗教的行いはしっかりやっているけれども、いざという時に、その勢いが一気にしぼんでしまうということです。

29:5 しかし、あなたの敵の群れも、細かいほこりのようになり、横暴な者の群れは、吹き飛ばもみがらのようになる。しかも、それはにわかに、急に起こる。29:6 万軍の主は、雷と地震と大きな音をもって、つむじ風と暴風と焼き尽くす火の炎をもって、あなたを訪れる。29:7 アリエルに戦いをいどむすべての民の群れ、これを攻めて、これを取り囲み、これをしいたげる者たちはみな、夢のようになり、夜の幻のようになる。29:8 飢えた者が、夢の中で食べ、目がさめると、その腹はから

であるように、渴いている者が、夢の中で飲み、目がさめると、なんとも疲れて、のどが干からびているように、シオンの山に戦いをいどむすべての民の群れも、そのようになる。

主がこれから、火のように燃えるような激しい働きをエルサレムのためにしてくださいませ。アッシリヤ軍が取り囲んでいます、それを一挙に滅ぼされます。

### 2C 深い眠りの霊 9-16

しかし、彼らはそのような主の大なる救いに対して、気づいていません。その様子を次に描いています。

29:9 のろくなれ。驚け。目を堅くつぶって見えなくなれ。彼らは酔うが、ぶどう酒によるのではない。ふらつが、強い酒によるのではない。29:10 主が、あなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目、預言者たちを閉じ、あなたがたの頭、先見者たちをおおわれたから。29:11 そこで、あなたがたにとっては、すべての幻が、封じられた書物のことばのようになった。これを、読み書きのできる人に渡して、「どうぞ、これを読んでください。」と言っても、「これは、封じられているから読めない。」と言い、29:12 また、その書物を、読み書きのできない人に渡して、「どうぞ、これを読んでください。」と言っても、「私は、読み書きができない。」と答えよう。

ユダにいる預言者たちは、確かにイスラエルにいる偽預言者たちのように、酒に酔いしれていることはなかったようです。しかし、「眠りの霊」が注がれていたというのです。預言者たちが、酒に酔って判断力がなくなるように、先にあるものを見えなくさせられていると言います。それは、どういうことか？一つの言い訳は「これは、封じられているから読めない。」というものです。聖書の解き明かしをすることを、預言者たちができないと言っているのです。封じられているから、できないのだと言っています。そして、もう一つは「私は、読み書きができない。」と言い訳しているのです。

主への祭りのように、宗教的活動はしていることはしているけれども、主の言葉に対してこのような態度を取っていると、主が何を今、行なわれているのか、何を語っておられるのかが分からなくなります。しばしば聞きますね、「黙示録は、封じられた書物だ。」と。しかし、黙示録の元々の意味は、「啓示」です。神がその意味を隠すために語られたのではなく、むしろ隠れているとされているものを、一気に全開している書物であります。主が語られたことは、明らかにそこで語られているように受け取ればよいのです。それを、自分の願望や理解、そうしたものを先行させているので、自分に合わせて読んでいこうとしてしまうために、封じられた書物になってしまうのです。

そして、「私は、読み書きができない。」という言い訳は、「私は、神学校に行っていないし、聖書教育を受けていないので、分かりません。」ということです。そうではありませんね、そのまま聖書を読んでいけばよいのです、分からないこともあるでしょう、しかし主が語られます。自分で本文を読んで、それでそのまま主が語られることに聞くのです。

29:13 そこで主は仰せられた。「この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことにすぎない。29:14 それゆえ、見よ、わたしはこの民に再び不思議なこと、驚き怪しむべきことをする。この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される。」

私たちが、主の教えに対して心の感動がなくなる時に、主から聞けなくなる時に、心がいつの間にか離れていきます。確かに、教会には足を運ぶでしょう。そして、祈りや賛美で、主の名を唱えているかもしれません。けれども、心が離れているのです。そして、そのような宗教的行事になっていると、その動機が「人に言われたから」という、人の教えになってしまいます。「誰々にこう言われたから」ということだけの礼拝です。イエス様がここのイザヤ書の言葉を何度も、ユダヤ人宗教指導者に対して、彼らのしきたりについて非難される時、それを行われました。

そこで主は不思議なことをされます。不思議というのは、神にしか使われない言葉です。私たちの思いを超えたところの業です。主は、知恵があるとされる者たち、悟りがあるとされる者たちが、どうしても分からないようにさせて、ご自分の働きを行なわれます。今、そんな時代に入っていますね。主のなされていることが、分からない時代に入っています。そこでしっかりと、御言葉に謙虚に聞き入らないといけない時になっています。それをしていないと、この人が教会について、聖書について権威者だと言われている人が、説明できないようなことが起こります。主が知者を愚かにされているのです。

29:15 ああ。主に自分のはかりごとを深く隠す者たち。彼らはやみの中で事を行ない、そして言う。「だれが、私たちを見ていよう。だれが、私たちを知っていよう。」と。29:16 ああ、あなたがたは、物をさかさに考えている。陶器師を粘土と同じにみなしてよかろうか。造られた者が、それを造った者に、「彼は私を造らなかった。」と言い、陶器が陶器師に、「彼はわからずやだ。」と言えようか。

エジプトとの同盟をアッシリヤに知られないように結んでいることを、指しています。アッシリヤに知られないようにやっていることを、実は主ご自身に知られないようになっていくように語られています。そうです、主ご自身がアッシリヤを通してユダに懲らしめを与えようとされているのですから、そのまま主の前に出て行って、自分の心のうちにあることを明かさないとはいけません。それなのに、自分たちで計画を立ててうまくいくと思っているのです。私たちはここに書かれているように、主の前に自分のことを持っていくこと、そのまま心を注ぎだして祈ることをしないと、自分で自分の計画を立てています。それはあたかも、神を信じていないかのようです。神が造り主なのですから、全ては明らかでこの方に申し出なければいけないのです。けれどもその反対に、「私の計画のほうが正しい」と心の中では言ってしまうのです。

### 3C 心の貧しき者の悟り 17-24

29:17 もうしばらくすれば、確かに、レバノンには果樹園に変わり、果樹園は森とみなされるようにな

る。29:18 その日、耳しい者が書物のことばを聞き、盲人の目が暗黒とやみの中から物を見る。29:19 へりくだる者は主によっていよいよ喜び、貧しい人はイスラエルの聖なる方によって楽しむ。29:20 横暴な者はいなくなり、あざける者は滅びてしまい、悪をしようとうかがう者はみな、断ち滅ぼされるからだ。29:21 彼らは、うわさ話で他人を罪に陥れ、城門でさばきをする者のあげあしを取り、正しい人を、むなしい理由でくつがえす。

再び、終わりの日における回復したイスラエルの幻を見せています。レバノンが果樹園、果樹園が森とみなされるというのは、緑豊かになるということです。その時に、豊かな祝福を受ける人々は、「書物のことばを聞」く人々であります。ここが、28章と29章のテーマです。主の言葉を、しっかりと聞いているか、その耳が開かれているか？ということです。そして、盲人が暗闇から物を見るというのは、すごいことです。それは健常者、目の見える人でもできないこと。けれども、見えるようにされるのです。これには、へりくだりがが必要です。主の語れることを乳飲み子のようなもの、なぜ反復するのかとあざ笑っていましたね。そして、主の前に出ていき、心を開くのではなくて、自分で計画を立てて勝手に抛り頼むものを見つけてしまいます。へりくだることによって、初めて御言葉によって神の声を聞くことができます。

そして神の御国には、横暴な者はいなくなります。貧しい者、へりくだる者がそこを受け継ぎます。その横暴な者とはどういう者かと言いますと、噂話をしていること、きちんと判断している人、治めている人をあざけて、その揚げ足を取る。またただ正しいことをしているのに、理由になっていないことでやめさせること。とても時宜になかった、今の状況に迫った内容です。

29:22 それゆえ、アブラハムを贖われた主は、ヤコブの家について、こう仰せられる。「今からは、ヤコブは恥を見ることがない。今からは、顔色を失うことがない。29:23 彼が自分の子らを見、自分たちの中で、わたしの手のわざを見るとき、彼らは私の名を聖とし、ヤコブの聖なる方を聖とし、イスラエルの神を恐れるからだ。29:24 心の迷っている者は悟りを得、つぶやく者もおしえを学ぶ。」

イスラエルの子孫が回復します。自分たちが悟っているようでまるで悟っていないという恥を、取り除くと約束しておられます。そして彼らは主を主とする、神を恐れると言っていますね。ここが、実言葉の理解に必要なことです。御言葉を自分の知性で理解しようとする態度ではなく、人格的に主のところに行き、この方を恐れ敬って聞く、このことができ初めて主に受け入れられた者となるのです。そして最後の言葉が、彼ら、また私たちの霊的問題の癒しです。心の迷い、つまり、いろいろ思いが右に左に言ってしまう人、心の定まらない人が、悟りを得るので、しっかりとします。安定します。それから、つぶやく、つまり自分のことだけを話している人が、反対に主から離しを聞くことができるようになります。ハレルヤです。主はこのために、私たちにアッシリヤのような試練を与えられることがあるでしょう。しかし、それは私たちが聖められるための訓練です。